生活のなかでの「生」と「性」

～児童養護施設 那爛陀学苑 訪問記～

編集部　松籟荘　佐々木 仁美　宇宙　平尾 奈緒美　あいさんテラス　加藤 眞由美

施設形態

本館……（定員30人、男女混合）
小規模グループケア……（6人）を含む。
地域小規模児童養護施設「ハルモニー」…（6人）

基本理念

◆ 子どもたちが安心、安全に暮らせるよう
　一人一人に寄り添い自立に向けた支援
自立支援計画を子どもと一緒に立てることで、職員の視点ではなく子ども自身の視点を重視します。
◆ 大切にされていると実感できる支援
性教育を通して、かけがえのない命、大切な存在であることを伝えていきます。
それは、自分自身を大切にし、他者をも大切にすることへとつながります。

はじめに

児童養護施設の小規模化を推進するにあたり、昨今さまざまな問題が表面化している。その問題にさまざまな切り口での取り組みがあるが、今回は名古屋市緑区にある児童養護施設　那爛陀学苑を訪問し、先駆的に取り組んでいる「生と性」の実践について稲垣恵施設長から話を伺った。話の中では、職員の連携と育成という視点からの内容や児童個々の発達に応じた（生と性）支援や職員の思いについての内容が中心となり、最終的には養育論の話にまで発展し、短い時間ではあったが非常に濃密な時間であった。我々訪問メンバーも深く感銘を受け、社会的養護実践例として広まってほしいという願いと、全く社会的養護の現場を知らない方々やこれから社会的養護の担い手になるであろう方々や現時点で社会的養護の担い手の方々などに知っていただきたいという思いから、今回この場で紹介する運びとなった。

取り組みのきっかけ

元々は女子のみの大舎制の施設であったが、平成19年、改築移転に伴い男女混合の施設に変換した。性問題が発覚したから性教育（生きて行くための教育）を始めた訳ではなく、以前から必要性はあるとの思いにより、移転改築を機に取り組むこととなる。取り組み当初は外部講師を招き講義を受ける形を取ったが、一過性にすぎず根付かなかったため、入所児童に対しては現場のケアしている職員が児童のニーズや発達状況に合わせて伝えて行くことが最善であろうということから、子どもたちと一緒に考えるという視点を大切にしながら、取り組み始めた。

ねらいなど

① 性教育は人権教育であると捉え、当たり前に児童それぞれが持った権利を根付かせる
② 性に関することだけではなく、生きるという視点から共に考えられる場とする
③ 日常生活に生かせるものとし、生活の中で自然に伝えていくことが大切であると捉える
④ 自分の身体のことを大切にし、自分の生まれたルーツを知って自分の命はかけがえのないものであるということを認識できるようにするものとする

実際の取り組み（例）

年齢毎（男女混合）に班編成をし、授業形式で実施する。事前に職員同士で指導役（先生的な役割）と子ども役になり、ロールプレイを行い、表現や内容が子どもに分かりやすいものかなどを検討する。また授業の雰囲気は穏やかで子どもが発言できるかなどさまざまな視点での検討を行う。

子どもからの質問で職員がその場では答えられないこともあるが、そのような時には次回の授業で回答できるように、準備をする。授業に出てもなかなか子どもの記憶に残らないことが多く、授業の内容を一人一人にプリントを配りファイルにとじておく。授業を始める前に子どもには招待状を渡し、授業に持参するという形を取っている。また年齢に応じて集中する時間の差があり、班毎（年齢毎）に授業時間に変化をつけている。

恋愛アンケート

≪恋愛調査≫

「生きるということ」もテーマのひとつであるため、人生プランについて考えた場合、例えば中高生になってくると「子どもができる体になったんだよ。それは素晴らしいことなんだけれども、妊娠にはリスクがある」という話をし、このテーマで進める場合には、「性交」なしでは話ができない。「付き合ってすぐに性交する。そうじゃない。生まれてくる子どもがきちんと健康に暮らすには経済力も必要」という話をしながら、「避妊」について考える。「生理がきませんが、どうしますか？」と投げかけ、児童には高校生や大学生それぞれの立場になって、考える場を作る。それを考える時に、児童

◇恋愛調査　〔氏名：　　〕

1、初恋はいつですか？
（幼児・小学生低学年・小学生高学年・中学生・高校生・まだない）

2、恋愛をどう思いますか？
（興味がある・興味なし・現在恋愛中・自分には関係ない・したくない）

3、「付き合う」って何だと思いますか？
（自分が楽しむもの・相手が楽しむもの・淋しい心を埋めるもの・暇つぶし）

4、付き合っている人はいますか？
（いる・いない）

「いる」と答えた人に聞きます。何%位好きですか？グラフに示してね。

0%　　50%　　100%

「いる」と答えた人に聞きます。相手の気持ちを考えたことはありますか？
（ある・ない・よくわからない）

5、付き合うとしたら何歳から何歳までの人と付き合いたいですか？
（　　歳　～　　歳）

6、付き合うとしたら、どんな人がいいですか？
（学生・社会人・その他）

7、次の所で出会うことをどう思いますか？
学校で知り合う（良いと思う・ふつう・悪いと思う・ありえない）
携帯やパソコンのサイトで知り合う（良いと思う・ふつう・悪いと思う・ありえない）
援助交際から付き合う（良いと思う・ふつう・悪いと思う・ありえない）

8、告白したことはありますか？
（ある・ない）
告白をしたことがある人はどのような方法ですか？（直接言う・手紙・メール）
告白をされたことのある人は（直接言う・手紙・メール）

に恋愛に関してどのような意識を持っているのかを自覚できるように、アンケートに記入することもある。また「ジェンダー」という授業もあり、男、女の一般的に言われるジェンダーフリーのチェックリストを作っている。施設に入所している児童には、男だから（女だから）～するべきだという概念はなく、男女の違いという部分をあまり認識できていない。このことは授業を通して、職員が知ることができた部分である。男の子は女の子のパートナーがいた場合、生理痛で苦しんでいる相手への痛みの緩和方法や生理用品の種類などの話もする。また男女混合で精通や生理の話をしたり、デートDVや世の中にあふれている性情報についての授業も行う。体の仕組みなどについては、科学的に話をすることが大切である。子どもたちは授業を受けるだけでなく、子どもが授業を行うこともあり、テーマを提供して職員と一緒に調べる。授業を行う職員は、各ユニットから1人ずついるため、担当ユニットの職員に聞きにくいことは他のユニットの職員に尋ねられるという利点がある。性教育の授業を行う中で、自分自身が性虐待を受けていたと認識する児童もおり、「やっぱりあれはおかしかったんだ」「自分が嫌だと思うことは間違っていなかったんだ」と話し出した児童もいた。犯罪や町中にあふれている性情報の話題も挙げ、中高生は1年4回編成での授業を行う。第2次性徴と自分たちの身体に起きている成長を学び、その後のライフプランを立て、最近の記事を新聞から抜き出し、職員が子どもとの話をする中でさまざまな疑問が出てきて、打ち合せの段階で次の授業の内容を考え、日常生活のささいな情報から話を広げ、子どもの実生活につなげ生かせるようにしている。

成果と職員の連携と育成

職員も子どもも「性」への抵抗感がなくなり、職員自身も知らないことが多く、実施して行く中で初めて知ったことも多くあった。また性教育を確立させるには相当の尽力が求められるが、その反面職員集団で知恵を出し合って作ることが純粋に楽しかったという意見もある。この取り組みを通じて、職員間の会話も増え、他ユニットの職員と協力する中で小規模化の中で抱えている孤立感なども和らぎ、共通認識が持ちやすく施設全体で取り組んでいる実感や一体感を得られたとのこと。また他ユニットの職員と連携する中で、刺激を受けたり共に支え合う職員体制が構築されている。

最後に

このような取り組みを知れば知るほど、児童への生活の中での性（生）のアプローチではあるが、急速に小規模化に向かっている児童分野の課題に対する、私たちへの提言ともいえるものであると思われた。